水族館へ行こう！

京都大学白浜水族館

36

イセエビ

△紀南の海を代表する海産動物イセエビ（水槽番号224）

謎多い名前の由来

宮崎　勝己

白浜水族館で展示飼育しているイセエビは、九州から千葉県の黒潮流域に生息し、南紀の海を代表する海産動物の一つである。最近の統計では、千葉県が日本一の漁獲高を誇り、三重県が2位、和歌山県と静岡県が3位争いをしている。

漢字で書くと「伊勢海老」となり、三重県の伊勢地方でたくさん捕れると思われがちだが、実際は伊勢ではほとんど捕れない。より南の志摩地方に多く、伊勢の商人たちによって運ばれたことからその名が付いたというのが一般的な説である。それ以外にも磯に多く見られる「磯海老」から来たという説、よろい武者を連想させる外観から「威勢がいい海老」という説もあり、実ははっきりしていない。

「伊勢海老」という名称は、室町時代末期に初めて文献に登場する。江戸時代になると、伊勢海老という名称はかなり定着し、正月飾りとして特に武家で珍重された。当時江戸に流通していたイセエビが鎌倉産であったことから「鎌倉海老」という名称も用いられた。

歴史的に見ると、奈良時代に編さんされた「出雲国風土記」に登場する「縞蝦（しまえび）」が、イセエビが文献に登場した最初であるとする研究者もいる。しかし、山陰にはイセエビやその近縁種はほとんど生息しておらず、この説には疑問が残る。江戸時代の書物には「縞（うみえび）」として、明らかにイセエビと認められる図が載っている。いまも「志摩海老」という名称が地方名として残っていることを併せると、漢字とその読みがさまざまに混同されて「縞蝦＝イセエビ」となってしまったのではなかろうか。「縞蝦」の正体は外観などから、山陰にも生息するハコエビという考えも出てくる。

普段何げなく使っている海の生物の名前であるが、詳しく調べてみると、さまざまな謎が出てきたり、人間の生活や文化、歴史とのかかわりが見えてきたりして、なかなか楽しいものである。

（京都大学講師）